

松江歴史館 NEWS MATSUREKI

企画展 「出雲国の白隠・大雅・風外」開催



白隠慧鶴筆「大応国師・大燈国師・関山国師図」(天倫寺蔵、企画展「出雲国の白隠・大雅・風外」で展示)

CONTENTS

- 館藏品展「平塚運一—いざ摺らん—」開催案内 2
- スポット展示・ミニ展示のご紹介 2
- 企画展「出雲国の白隠・大雅・風外」開催特報 3
- 松江おもしろ談義ダイジェスト 4
- コラム「雲陽秘事記あらかると」第3回(名誉館長 藤岡大拙) 5
- 基本展示室案内 6
- 松江歴史館のお仕事 — 展示替え — 7
- 歴史スポットめぐり — 北惣門橋 — 7
- 地域ゆかりの資料紹介 — 雑賀町編 — 8

【第4号】
2023年
春号

「平塚運一—いざ摺らん—」

開催中!

いざ 摺らん

展覧会情報

館藏品展

「平塚運一—いざ摺らん—」

令和5年(2023)

4月2日(日)まで

休館日/毎週月曜日

開館時間/9時~17時
(観覧受付は16時30分まで)

会場/松江歴史館 企画展示室

主催/松江歴史館

観覧料 大人 300円(240円)

小学・中学・高校・専門学校・大学生 無料

※高校・大学・専門学校等に通う学生は

学生証の提示が必要です。

※基本展示室とのセット券の料金は大人650円(520円)

※()内は団体料金

関連イベント

ギャラリートーク

3月8日(水)、3月21日(火・祝)

14:00~14:40

会場/松江歴史館 企画展示室

※観覧券または年間パスポートが必要です。

※最新の情報は松江歴史館のホームページでご確認ください。
※新型コロナウイルス感染症の影響により予定を変更する場合があります。

平塚運一(ひらつかうんいち) 二八九五—一九九七、松江市長

市民は、これまで分業により制作されていた版画の工程を全て一人で行う創作版画の草創

期を築いた松江出身の版画家です。平塚は、

歴史的な建造物や風景をモチーフにし、

黒白版画と呼ばれる力強さと風格に

満ちた作品を多く生み出しました。

本展では、館藏品から約四〇点、また、

平塚の出身校である島根県立松江

商業高等学校より平塚が版画制作

に用いた道具を出品いただき、

平塚の画業の一端に迫ります。

力強さと風格にみちた平塚の

作品の魅力を感じていただ

ければ幸いです。

スポット展示・ミニ展示のご紹介

館内の小さな展示スペースに、新収藏品や最新の研究にまつわる資料、四季折々の作品などを特集展示しています。おおよそ2か月に一度、展示替えをします。

スポット展示

令和5年(2023) 4月4日(火)~5月28日(日)

出雲札の巡礼道

かつて松江の風物詩だった春の巡礼。出雲の観音霊場三十三か所を巡る札打ちは、死者の供養のみならず、娯楽的要素を含みつつ、江戸時代から戦前にかけて盛んに行われました。江戸時代、松江末次魚町に居住した人物は、札場と巡礼道が描かれた「出雲国十郡絵図」を手に入れました。明治時代、平田の商人は友と連れ立ち巡拝しました。巡礼者の懐中には、観音様の御影と御詠歌を刷った紙があったのかもしれない。本展では、巡礼の季節に出雲札に関する資料を紹介します。



「出雲国十郡絵図」(当館蔵)

会場 基本展示室最終コーナー(要基本展示観覧券)

ミニ展示

令和5年(2023) 4月4日(火)~5月28日(日)

不昧のハンコ

江戸時代以降の書画には必ずといっていいほど押されるハンコ。作者をしめす落款印のほか、はじまりの部分に押す関防印などの種類があります。松江藩松平家7代藩主で、大名茶人として知られる松平治郷(不昧)の書画にもさまざまな印が用いられ、中には不昧が好んだ瓢筆のかたちのものなどもありました。本展では、4月24日の不昧忌にあわせて、不昧所用の印やそれらが押された書画を紹介します。



「松平不昧所持印」(当館蔵)

会場 展示室前展示ホール(観覧無料)

「出雲国の 白隠・大雅・風外」

開催特報！



ユニークな絵画で禅を広める

白隠慧鶴筆「鍾馗図」(海禅寺蔵／前期展示)

中国の道教系の神で、日本では疱瘡除けをかなえる神として知られる鍾馗を描いています。鍾馗は、子が押さえるすり鉢にいる4匹の鬼にむかってすりこぎを下ろし、今にもすり潰そうとしているところです。画面の自賛(白隠がみずから書いたことば)によれば、本作は民たちに白隠禅の教えを宣伝するような内容であると解釈されます。白隠は、こうしたおもしろみのある絵を描き、禅の教えを広めました。



大雅と葦津の交流

池大雅筆
「杯渡尊者図」(田部美術館蔵)

中国の僧侶・杯渡が唇をかたく結び、右手に宝塔を持ち身体に力をこめています。眉はつり上がり目にも強い力がこもりますが、やわらかい墨線によってなんだか可愛らしくも見えるでしょうか。画面左側の大雅の自賛によれば、白隠の弟子で永徳寺(出雲市斐川町)四世の葦津慧隆が、師の白隠に遠慮して賛をしたためなかったため、代わりに大雅が自身で賛をしたとあります。大雅と葦津、そして白隠のかかわりをしめす作品です。



風外本高筆「三仙女図」(個人蔵／前期展示)

江戸時代なかば、臨済宗を中興し、民衆への禅の普及に尽力した僧・白隠慧鶴。出雲国では、白隠門下の葦津慧隆(永徳寺)と円桂祖純(天倫寺)の二人の僧が住職をつとめていました。この二人を頼って、白隠に禅を学んでいた文人画家・池大雅が出雲国へ訪れたといえます。また曹洞宗の僧・風外本高も出雲国に来訪し、当地に遺る大雅の書画に学び、出雲国の人々と交流を深めました。本展では、出雲国にゆかりの白隠・大雅・風外による書画の魅力や、当地での足跡、伝承などを紹介します。

展覧会情報

企画展

「出雲国の白隠・大雅・風外 — 往来する禅と書画 —」

令和5年(2023)4月28日(金)~6月25日(日) 前期4/28~5/28 後期5/30~6/25

休館日/毎週月曜日

※ただし5月1日(月)は開館

開館時間/9時~17時

(観覧受付は16時30分まで)

会場/松江歴史館 企画展示室

主催/松江歴史館

観覧料/大人 500円(400円) 小・中学生 250円(200円)

※高校・大学・専門学校に通う学生は学生証の提示で団体料金

※基本展示室とのセット券

大人 800円(640円) 小・中学生 400円(320円)

※()内は団体料金

※各種イベント等の詳細は企画展チラシや松江歴史館ホームページでご案内しています。 ※新型コロナウイルス感染症の影響により予定を変更する場合があります。

松江おもしろ談義ダイジェスト

松江歴史館では、毎月1回、1時間、毎回異なるテーマを設けて、松江の歴史やゆかりの美術のお話しをする「松江おもしろ談義」を開催しています。令和4年5月、6月、10月の内容をダイジェストでお届けします。

5月

島根の民藝を支えた人々

島根の民藝運動を推進した松江商工会議所理事・太田直行の活動を中心に紹介しました。島根で民藝運動が本格的に始まったきっかけは、昭和6年(1931)、太田が民藝運動の提唱者である柳宗悦を島根に呼び、民藝の美しさに沿う日用品を島根で見出す目的で行われた「島根工藝診察」でした。そこで出雲の「日の出団扇」や布志名焼の「ぼてぼて茶碗」、石見地方では「喜阿弥焼」などが見出されました。太田は民藝運動をより活発にし、産業的に成功させる目的があり、東京や大阪で販売会を開催するなど積極的に活動を行いました。



「ぼてぼて茶碗」(個人蔵)

講師 副主任学芸員 大多和弥生

6月

明治時代のワクチン接種 —松江の種痘—

古来より人類を苦しめ続けた感染症「天然痘」について感染予防の取組を紹介しました。18世紀末にイギリスで完成した天然痘のワクチン「種痘」は、江戸時代後期に日本へ伝来し、以降各藩で種痘が行われました。松江藩では9代藩主松平齊貴が種痘医の錦織春象を登用して広く種痘が行われています。

各藩それぞれで種痘が行われていましたが、明治政府は国の事業として種痘を行います。明治7年(1874)に国は種痘規則を布達し、種痘を受けた人には証明書である種痘証を配布します。館蔵の県内最古の種痘証や集団接種を行っていたことを示す種痘証から、明治時代での松江における感染症対策を紹介しました。



「県内最古の種痘証(明治8年2月頃)」
(当館蔵)

講師 主任学芸員 新庄正典

10月

幕末・明治の松江の絵師が描いた 「松平直政初陣図」について

松江藩松平家初代藩主の直政は、14歳の時、大坂冬の陣で初陣を果たしました。その姿を描いたのが「松平直政初陣図」です。幕末に松江藩の御用をつとめた絵師・陶山勝寂が明治期に手がけた作品がよく知られています。幕末の藩儒・桃節山の著作に、出雲国に伝わる「松平直政初陣図」は、薩摩藩邸の床に掛けられた同図を松平家7代藩主の治郷が見て、絵師に写させ持ち帰ったのが始まりだという説が書かれています。数点見つかったりしている現存作例はそれぞれ細部に違いがあり三系統に分類できること、浮世絵の武者図の中に、直政初陣図と似た図がいくつかあり、図像の典拠となった可能性があることをお話ししました。



陶山勝寂筆「松平直政初陣図」(当館蔵)部分

講師 学芸員 藤岡奈緒美

令和5年度の松江おもしろ談義

演題や講師などの情報は、松江歴史館ホームページ、『市報松江』などで随時ご案内します。ぜひご参加ください。

日にち/4/23、5/21、6/18、7/16、8/20、9/17、
10/15、11/19、12/17、1/21、2/18、3/17

時間/14:00~15:00

料金/無料

定員/60名(要申込)

申込先/松江歴史館(TEL 0852-32-1607)

※新型コロナウイルス感染症の影響により予定を変更する場合があります。

【第3回】

雲陽 秘事記

あらかると

願楽寺の濱納豆

寛文年中（二六六〇年代）の事だが、松平直政が鷹狩りのため、神門郡（出雲市の西半）へ出かけたことがあった。その時、白枝村（現白枝町）の願楽寺に立ち寄りたというので、家来の水野佐平太を遣わしてその旨を寺へ申し入れた。寺では突然のことで、大いに慌てたと思われるが、何せ名譽なことだから断る理由はない。

まず、薄茶がでた。薄茶の史料としては、出雲では早いほうだ。直政は茶を喫しながら、住持らとよもやま話に刻を移した。そのうち、濱納豆がでたが、直政はたいそう気に入ったらしい。原文には「濱納豆殊の外思召に叶ひ、御誉被遊」とあるから、美味しい美味しいと言つて誉めたのであった。以来、願楽寺は毎年納豆を献上したという。その上、当寺に秘蔵する瀬戸の大海の茶入も気に入り、所望して城へ持ち帰ったという。

さて、この直政お気に入りの濱納豆だが、いかなる納豆か。日本国語大辞典によると、



名誉館長
藤岡 大拙

『言継卿記』弘治三年（二五五七）正月二十二日の条に初見するというから相当古い。浜松市三ヶ日町大福寺で作り始めたと言われる。当世流行りのネットを覗くと、浜松城にいた若き家康に献上したところ、いたく気に入るので、濱名（濱名）の納豆はまだか」と催促するほどだったので、濱納豆の名が生まれたという。

この話と願楽寺の話は、なんとなく筋が似ている。それもそのはず、直政は家康の孫であるから、直政は子供のころから濱納豆を食していたであろう。出雲藩に入部してきて、久しぶりに濱納豆を食べ、すぐ懐かしかったのではなからうか。濱納豆はご存じの糸引き納豆と製法が違い、京都の大徳寺納豆の同類で、麹菌によって大豆を発酵させたものである。

大海の茶入とは、大ぶりの茶入のこと。大海の茶入といえは、寛文年間を去ること八十年ほど前、備中松山（高梁市）の河畔で討たれた山中鹿介も、所持していた。その写真が谷口廻瀾『山中鹿介』のグラビアに載っている。たぶんそのような大きさのものだったろう。

雲陽秘事記

何時、誰が著したか分からないが、人から人へ書き写されて伝わった逸話集。松江藩松平家初代藩主直政から六代藩主宗徳の時代までが取り扱われ、後、八代藩主斉恒までが追記された。収録された約二〇〇話にも及ぶ記事は、虚実混交の憾みがあるとはいえず、よく吟味して読むと、松江藩の歴史の深叢に分け入ることができる。

筆者評

出雲に納豆があったとは驚きである。もちろん、出雲で製造していたに違いない。早速白枝町の人に聞いてみたが、誰も知らないとのことだった。おそらく製法など絶えて久しかろう。願楽寺は浄土真宗本願寺派の大刹である。雲州白枝願楽寺濱納豆なるものを、もう一度復元してみたいかがであらうか。

今一つ、直政はあちこちで鷹狩りをやっている。注目すべきは、その都度、村の有力者、例えば庄屋、寺社などを訪ねて饗応を受けている。これは遊びではない。鷹狩りをしながら民情を収集把握せんとしているのである。

松江歴史館 基本展示室案内



松江城の東隣、家老屋敷の跡に建つ松江歴史館では、城下町の成り立ちや松江藩の歴史と文化をテーマとする基本展示を常時開催しています。堀尾吉晴による松江開府の物語を映像で、幕末の松江城下を六〇〇分のスケールの模型でご覧いただき、展示室をぐるりと一周すれば、山陰地方独特の気候と風土のなかで培われた人々の生き方や歴史、この街に根付く「松江らしさ」の源泉を発見することができます。

展示コーナー 松江の開府

国宝松江城天守の模型

松江城天守雛形(松江市指定文化財)



堀尾氏が築いた天守を松平氏の治世に修理するにあたり制作されたという模型。歴代藩主が登閣に際して目にしたものと伝わります。

破風には松江藩主松平家が使用した「五三の桐」紋があらわれています。現在の天守には、桐紋ではなく「三ツ葉葵」の鬼瓦が葺かれています。それもまた松平家の紋所です。

Pick Up!

基本展示室に陳列している約一〇〇〇件の資料の中から、主なものを紹介します。資料を飾る文様・印に注目すると、持ち主やその品に込められた想いを読み取ることができます。



展示コーナー 松江藩に仕えた人々

松江藩士の心意気

金小札紺糸織二枚胴具足

松江藩家老の大橋家伝来とされる甲冑。兜の正面を飾る逆ハート形の「猪の目」印は松江藩の合印、戦場で敵と味方を区別するために付けたお揃いの印です。猪のように後へ退かない心意気を表しています。

展示コーナー 松江藩を支えた産業

出雲国の産業の“大関”木綿

筒描藍染めの風呂敷

相撲の番付に見立て、出雲国に利益をもたらす物事をあらわにしたランキング表で、最高位の「大関」に格付けされた木綿。松江藩の財政を支えた特産の木綿に、出雲の紺屋の特色といわれた筒描という技法で文様を染抜いた風呂敷です。対角に配された「麻の葉」文様は、真っ直ぐにのびる麻にあやかって子どもの着物などに用いられた縁起の良い文様です。



利用案内

基本展示観覧料
大 人 510円
小・中学生 250円
(20名以上の団体は2割引)

年間パスポート
大 人 1,560円
小・中学生 780円

1年間(発行日の翌年同月末日まで)有効。
松江歴史館の基本展示と企画展示、
松江ホーランエンヤ伝承館が何でもご覧いただけます。

松江歴史館のお仕事

年数を経て弱くなった木札をきずつけないよう、きれいに洗った素手で扱います。動かすときは両手で、慎重に。

展示替え

基本展示室を訪れるたびに新たな発見を楽しんでいただけるよう、3か月に一度、展示替えをしています。松江藩主齊貴の上洛を描いた大名行列図は、全長110メートル、行列に従事した1767人を描く大作です。松江歴史館の開館から少しずつ場面を替えてゆき、令和4年秋ようやくお殿様の駕籠が姿を現しました。行列の最後尾を披露するにはまだまだ時間がかかりそうです。

国宝松江城天守に付属する祈祷札は、建物の完成時期を裏付ける墨書がある大変貴重な木札です。資料の劣化を防ぐため、年間の展示回数と日数を制限しています。展示替えは、ただ資料を入れ替えるだけではありません。収蔵庫で保管している資料の状態を確認し、実際に目で見て調査することができる大切な機会でもあります。



松江城天守祈祷札の展示替え

展示すると見えなくなる裏面の文字も確認します。



松江城天守鎮宅祈祷札の展示替え

きた そうもん はし 北惣門橋

松江歴史館の門を出ると、1本の橋が目に入ります。松江城内堀に架かる木橋で「北惣門橋」といいます。江戸時代、橋の先には北惣門があり、重臣屋敷が集中する北からの城内への出入り口でした。二階造りの櫓門で、屋根に鯨がのっている北惣門の姿が、絵図により伝わっています。北惣門橋の存在もまた絵図に描かれており、松江開府後間もない2代藩主堀尾忠晴の頃から場所を変えていないことが分かります。

北惣門橋は明治時代に石造のアーチ橋に変わりましたが、平成6年(1994)、史跡松江城の景観にふさわしい木橋に復元されました。現在の橋は“新”木橋の2代目です。令和4年(2022)夏、老朽化した先代を解体して架け替えられました。

家老屋敷だった松江歴史館から、新しい橋を渡って松江城に登るのは、とても良い気分ですよ。

ひと足のばして 歴史スポットめぐり



北惣門橋と松江歴史館

[アクセス]
松江歴史館より西へすぐ

わがどこのに、 何があーかね？

【雑賀町編】

出雲弁で「わたしたちの地域に何があるの?」という意味。

松江歴史館は、松江市域ゆかりの歴史資料や美術作品を多数収蔵しています。このシリーズでは、収蔵資料や近年調査した資料などを地域ごとに紹介します。今回は令和5年夏の企画展「みんなの小学校 150年の歩み」(7/21~9/24開催予定)にちなみ、雑賀町について紹介します。



松江城下の南端に位置する町は、整然と碁盤状に区画された雑賀町です。

雑賀町は足軽(鉄砲隊)が集住する町として、城下の造成の際に完成しました。

雑賀町の足軽は戦闘時に最前線を受け持ったため、武芸に励んでいました。

しかし、太平の世が続く中で、武芸よりも教育に重点を移していきます。

足軽は戦闘員ではなくなり、「読み書き算盤」といった実務能力が重要視される下級官吏となっていくのです。

足軽は官吏としての功績次第で上級武士である侍へ出世することもでき、雑賀町では立身出世のため、子弟の教育が盛んとなっていきました。

町内には民間の教育機関である私塾や寺子屋が数多く開設され、明治初年までに私塾が四、寺子屋が十二あつたといえます。それらの施設で指導したのもまた雑賀町の人物でした。

澤野修輔が開いた培塾では「人間の心を培い自主独立、不屈の精神」を説き、若槻禮次郎や岸清一、梅謙次郎等の近代日本の発展に寄与した人物が学んでいます。

明治五年(一八七二)に近代制の学校制度を定めた学制が公布され、その翌年に松江で最初の小学校が雑賀町に創設されます。雑賀小学校(当時は第七区小学)の校長には澤野修輔、教諭には和算を極めた久保田愛之丞、若槻禮次郎が習字を学んだ松本宗四郎等がなり、後進を指導します。

雑賀小学校では、自立と不屈の精神を貴ぶ「雑賀魂」が開校二五〇年を経た現在でも受け継がれています。足軽の町として完成した雑賀町は、現在では教育の町となったのです。

(主任学芸員 新庄正典)

寺子屋「松本宗四郎塾」の看板(当館蔵)



表面

裏面

寺子屋「松本宗四郎塾」の看板(当館蔵)



「松江城下絵図」(嘉永3年(1850)、当館蔵)



雑賀町周辺部分拡大



和算を行うための算木(久保田愛之丞旧蔵、当館蔵)